

編集後記

諸般の事情により第一〇九号の発刊が一年以上遅れてしまいましたことを、まずもってお詫び申し上げます。

この間、昨年（二〇一七年）の三月三十一日に、安富信哉先生が急逝されるという悲しい出来事がありました。二〇一三年に大谷大学を退職されて名誉教授となられてからも、真宗大谷派講師・教学研究所長・EBS事務局長という重責を担われ、現代の真宗研究をリードし続ける大先輩でした。安富先生の薫陶を受けた多くの真宗学徒の一人として、先生がずっと願われていた「開かれた真宗学」という方向を少しずつでも先に進めて行く責任を痛感します。

安富先生がまだ三十代半ばの若き研究者として『親鸞教学』の編集に尽力されていた一九七九年、第三四号には「真宗学の現在」という特集が組まれ、その編集後記に安富先生は次のように記されています。「真宗学が開かれる道は、ほかの現実に触れる以外にはない。宗門の行手は厳しいが、言えることは、現実がある限り、真宗学の使命は無限に大きい

ということである。」

この現実に触れることを通して真実を明らかにしていく使命感は、「Be Real」という大谷大学の新しい Motto に表現されているものですが、厳しい現実、危機的情況に直面する中で一層堅固になるべき思いです。八十五歳以降の親鸞聖人の思索は、この現実と真実の通路を開くことに集中しているように思えます。九十一歳を過ぎた曾我先生が「往生と成仏」に関する一連の論考の中で「往生は心にあり、成仏は身にあり」「往生は現在にあり、現生にあり——こう言わなきゃならん」という思い切った結論に到達されたのも、厳しい現実の中に浸透して人々の目覚めを促す大悲の働きを明らかにしなければという使命感によると思われれます。「今日のわれわれは、今までの教学は完成しておらんのでありますからして、完全にするようになんが手を取って努力してゆくべきさういう時機に到達したと私は思う」（『親鸞との対話』二〇二頁）という曾我先生の言葉から五十年を経た今、改めてその努力を継続していかなければと思います。

本号の巻頭には、延塚知道教授による

「一心帰命と一心願生」を掲載させていただきました。親鸞が最も大切に論じた「難思議往生」について、その積極的意義を明確にされたオリジナルな論考です。中山量純任期制助教（執筆当時）には、「無義為義——親鸞晩年の課題と二種回向——」と題して在任中の研究成果を示す論文を寄稿していただきました。籠弘信氏（元大谷大学特別研修員）に御寄稿いただいた「愚禿善信」考——文明版『正像末和讃』の撰号をめぐって——は、氏が長年に渡り取り組まれてきた親鸞の改名に関する研究に新たな角度から光をあてるものです。鍵主良敬大谷大学名誉教授による「曇鸞大師「無生の生」の誤謬説を嘆く」は、二〇一五年度真宗学会大会における御講演の講演録です。鍵主先生には本誌掲載にあたり加筆修正に御尽力いただき、有り難うございました。連載中の金子大榮先生の講義「『教行信証』の諸問題」及び安田理深先生の講義「願生論」は、それぞれ十七回目と十四回目の筆録を収めています。発行の大幅な遅れの中、御理解と御協力をいただいた執筆の先生方に心から御礼申し上げます。（井上）